

花を褥

(大正七年寮歌)

松本五六君 作歌
峰秀雄君 作曲

一

花を褥の草枕
霞に暮るる野辺の春
ローマの晨ナイルの夕べ
栄華よあはれ夢の跡
傾く月に猶心せず
驕奢に酔ひし人々の
惰睡を破る雄叫や
健児義を取る北の国

二

世の敗類に神怒り
南の洋に濤さわぎ
腥風荒さび天日暗く
欧亜の文華影消えぬ
堯舜去りて妖雲霽れず
江河氾濫れて未濁る
暴虐無道幾年ぞ
吾等立つべき時ぞ今

三

煙霞曠しき石狩の
荒野に立ちて嘯けば
霜枯れ吹雪く原始の森に
エルゼの歌も微かなり
手稲の嶺に夕陽淡く
宇宙の神秘畏れみて
雄々しき自然に育まれ
雲呼び沖天に翼搏たん

四

春の女神の訪れに
花は綻び鳥謡ひ
翠の樹蔭に鈴蘭香り
露の涼しき夏の朝
時雨に漂ふ牧場の紅葉
白雪晴るる冬の景
書読む歳は豊平の
時の流れに恵あり

五

薫る春風アカシヤの
情操床しき若人が
崇き希望の象徴と仰ぐ
聖き北斗の瞬に
真理の道の暗示を索め
純しき玉の緒一百を
一つに懸けて結びたる
自治の基礎動きなし

六

烏兔流光の移ろひて
昔の友は在はさねど
十三年の光榮ある歴史
護り伝へて極限無し
自由の大旗正義の剣
天下の民を済ふべし
戦いの場の首途とて
宴の盃いざ汲まん